



# 何でも魚<sup>うお</sup>ツチング

## No.72 『 ヤナギガレイ 』

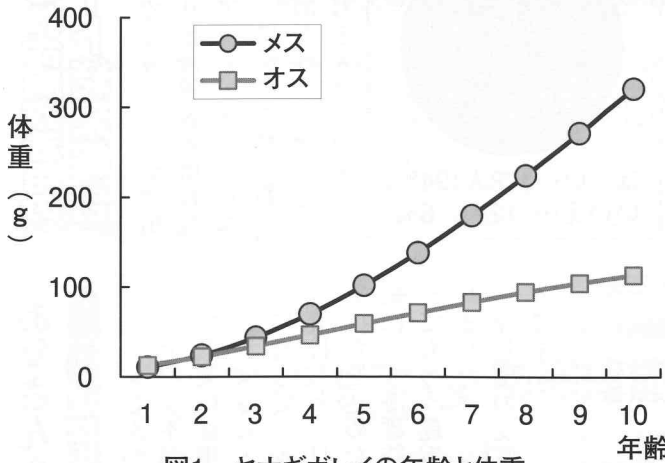
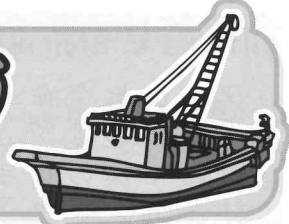


図1 ヤナギガレイの年齢と体重

庄内でカレイといえれば何を思い浮かべるでしょうか？やはり口細ガレイでしょうか。でも、味、価格ともに負けない種類があります。それはヤナギガレイ。標準和名はヤナギムシガレイで、別名のクビナガ、クリノキハはいずれも細長い体にちなんだ呼び方です。特に一夜干しは最高で、さっと炙れば香ばしい皮と上品な旨さの身、ほね離れも良いので、子供たちも大好きです。西日本では笹ガレイと呼ばれ、高級品として扱われるのも頷けます。

山形県における年齢と体重の関係を調べたところ、図1のとおりでした。他のカレイ類と同じく、オスとメスで成長に差があって、3才以降はメスの方が断然大きくなり、8才で200gを超える立

派な魚体になります。一方のオスは10才になっても100gちょっとにしかなりません。

水揚げされ始めるのは2〜3才からです。口細や大羽ガレイと比較して、ヤナギガレイの成長はとて遅く、同じ大きさになるまで倍くらいの年数がかかります。その替わり長生きで、12才くらいまで生きます。

あら場に生息するカレイ類としてはめざらしく、ほぼ100%底びき網漁業で水揚げされています。漁獲量は、図2のとおり平成13年までは年間数トンだったものが、それ以降は増加に転じ、近年では20〜30トンとなっています。量でも口細ガレイに迫る勢いですね。漁獲量が増えたのは平成12年に生まれた稚魚の生き

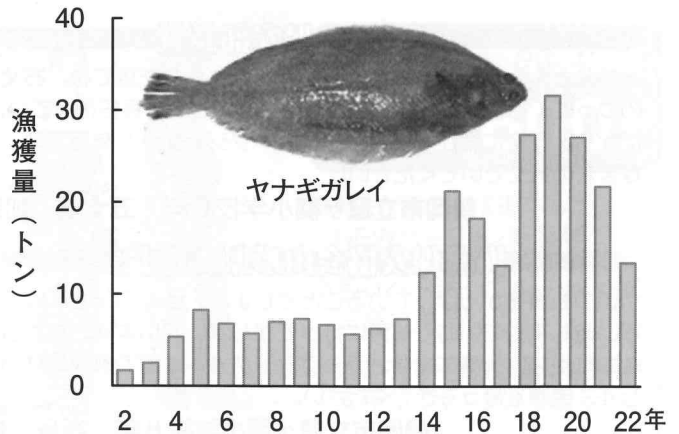


図2 山形県におけるヤナギガレイの漁獲量

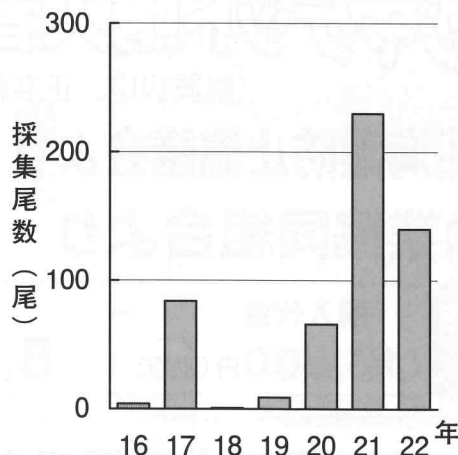


図3 当歳魚の年別採集尾数

残りが良かったことが大きく貢献しています。

では、これからどうなるのでしょうか。最上丸では、毎年どの位の稚魚が生きたのか調査をしています。平成16年以降の状況は図3のとおりです。

まず、注目して欲しいのが平成16〜19年の間で17年以外はとも少なかつたことです。実際に漁獲されているヤナギガレイの年齢を調べても主要銘柄である20〜60尾入れ(3kg)の約8割は17年生まれで占められています。最近、漁獲量が下降気味なのはこのせいでしょう。

でも、安心して下さい。20年以降は安定して生き残り、特に21年はとても多かったのです。この21年に生まれた「団塊の世代」が水揚げされ始めるのは今年の漁期から。始めのうちは小さい銘柄で価格も安いでしょうから、大切に付き合っていきたいですね。何せ、ヤナギガレイは長生きですから。

水産試験場 海洋資源部 主任専門研究員 阿部 信彦

● 浜に広げよう、「ぎょさい」の輪!!